

論諸論

渡邊 法美
高知工科大学教授

今後の建設業界と住民との共創を考
えるために、今年の3月上旬に、イン
ドネシア震災復興と河川再生の状況を
見学させて頂いた。

インドネシアに着目した理由は、経
済に関する国民の生活満足度は必ず
しも高くはないが、結婚、家族生活、
友人など非経済的な分野における生活
満足度は極めて高いという調査結果が
存在するからである。震災復興過程に
着目した理由は、「復興
過程において絶対に壊し
てはいけないものは、人
のつながりである」とい

う阪神大震災の被災者の方の声を伺っ
たからである。特に不法占拠者が住ん
でいる河川の再生とは、社会資本整備
の基本目標の一つであるライフの再
生、すなわち、生活と生命の再生にほ
かならないと考えたからである。

ガチャマダ大学の先生や学生の方々の
協力を頂いて、シヨクジャカルタ市の
カソカン・コダケテ両地区の震災復
興状況と、カリチヨデ・ウィノンゴ両

河川の再生状況を見学し、住民の方々
にお話を伺った。

見学は驚きの連続であった。まず、
どの地区に行っても、「こんにはは」
と笑顔に溢れているのである。わずか
2日間の滞在であったが、1年分のこ
んにちほと笑顔を見て帰国した。
カソカン地区における住宅再建作業
では、建設会社は全く関与していない。
コミュニティの中で、約10世帯ごと

にひとつの組を形成し、政府と大学の
指導の基に、自分たちの手でゆくり
と建設していた。1年以上テントで暮
らしている方々も少なくないようであ
ったが、住民の住宅に関する満足度は
高いと感じられた。

カリチヨデ川では、貧しい暮らしの
中にも、子どもたちに愛され、使用さ
れている多くの芸術作品や建築構造物
があった。これらは、当時、ガチャマ

建設業界の共創—住民との共創

ダ大学の教授であり、キリスト教の牧
師でもあった Mangunwijaya
a博士がデザインしたものである。当
初、市政府は、川辺に住みついていた不
法占拠者を一掃するつもりであった。

しかし博士は、「人々はそこに住む権
利がある」とこの政府案に真っ向から
反対する。自らこの地区に住み、住人
の思いをデザインし、ドイツ留学時代
の友人などから資金を得ながら、施設

を少しずつ建設していった。カリチヨ
デ川の再生事業は、住民ワークショッ
プの原点かつ集大成とも言つべき大
な事業であり、都市計画や建築を志す
インドネシア人学生の「聖地」となっ
ている。私も聖地において、恥ずかし
ながら50歳近くになって初めて、暮ら
しの中に芸術が不可欠であることを実
感したのであった。

これらの地区の共創は、「ために共

創」短い時間で人々のために痛みを和
らげる」というよりは、「ともに共創
」時間をかけて、ともに痛みと向き合
う」であると感した。

NPO法人ハンスオン！埼玉の西川
正氏は、「公共施設は、『市民のため
に』ではなく、『市民とともに』歩ん
でこそ、『私の代いじな場所』になる
のだ」と主張する。今回伺った事例は、
ライフの再生という極限の状態におい
ても、「ともに共創」

をまざまざと感じさせてくれたのであ
った。
戦後、日本の建設業界は、人々のた
めに黙々と働いてきた。ただし、我が
業界の本当の強みは、「ともに歩くこ
とができる」点にもあるような気がし
てならない。今後は、「ともに共創」

と「ために共創」の融合が、住民と市
民にとって、そして業界にとっても
益々重要になってくるように思う。

住民とともに痛みに向
き合いながら歩ん
でいくことが必要であること